

令和6年度第1回南魚沼市総合教育会議 会議録（要旨）

日 時 令和6年12月23日（月） 13時30分～14時45分

場 所 南魚沼市図書館 多目的室

出席者 南魚沼市長
林 茂男
教育委員会
教育長
岡村 秀康
委員
西野 仁、角谷 正雄、川島 亜紀子、須藤 文子

（事務局出席者）

市長部局
総務部長 片桐 克巳
企画政策課長 見留 雅之
企画政策課行革主幹 小林 吉通
教育委員会事務局
教育部長 高橋 悟
学校教育課長 関 浩二
管理指導主事 小島 誠
管理指導主事 南雲 真一
指導主事 中村 浩
社会教育課長 西潟 英男
生涯スポーツ課長 吉田 大輔
図書センター長 小林 利恵子
学校教育課庶務主幹 青木 秀行
学校教育課学校指導係長 林 順子

協議事項 (1)子ども達の逞しさの育成について
(2)学力向上の取組について
(3)その他

事務局 (企画政策課長)	本日はお忙しいところ、ご出席をいただきまして大変ありがとうございます。 開会に先立ち、資料の確認をお願いします。 (次第、出席者名簿、資料 1、資料 2 の確認) それではただいまから、令和 6 年度第 1 回南魚沼市総合教育会議を開催いたします。初めに林市長から挨拶を申し上げます。
市長	改めまして皆さんこんにちは。本日はお足元の悪い中、総合教育会議にお集まりいただきまして大変ありがとうございます。 当市にとって雪は産業、経済の資源となりますので、観光面で困ることなくスムーズにスノーシーズンを迎えられたことをありがたく感じています。私は長く観光産業に従事していましたが、年末に雪の心配をしなくてよい年はこれまでで半分以下だったと思います。また、昨年の大湯水では農業に大きな打撃を受けたこともあり、降雪は当市にとって悪いばかりではないと改めて感じています。 私事ではありますが、この度改めて市民の皆様から負託を受け、4 年間の時間をいただくこととなりました。至らないところもありますが、教育委員の皆様からもご指導をいただきたいと考えております。 先日の選挙活動の中で大勢の人と会う機会がありました。4 年前の選挙の際は、新型コロナウイルスの感染者が市内で初めて発生した時期であり、選挙活動を途中で切り上げて市役所で陣頭指揮を執ったため、選挙活動の中で市民の方の評価を直接感じたり、市民の皆さんがどのようなことを望んでいるのかを直接聞くことができませんでした。今回は可能な限り集会に参加し、街頭演説を行いました。その中で得られた情報として、子ども達の将来に不安を感じている方々が非常に多いと感じました。 本日は私が招集させていただいた会議となり、2 つのテーマを用意してありますが、これに限らず色々なご意見をいただきたいと考えておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。
事務局 (企画政策課長)	本日の出席者は、お配りの「出席者名簿」「座席表」のとおりでありますので、ご紹介を省略させていただきます。 それでは次第に沿って進行させていただきたいと思います。 【次第 3 「総合教育会議の役割等」について、別添「地方教育行政の組織及び運営に関する法律（抄）」を用いて説明】 次第 4 「協議事項」に入りますが、本日 15 時から教育委員会が開催されますので、14 時 45 分を目途に会議の終了を予定しております。スムーズな進行に御協力をお願いします。それでは林市長より進行をお願いいたします。
市長	それでは協議に入ります。今回協議事項を 2 つ用意させていただきました。

たが、特に協議事項（１）「子ども達の逞しさについて」について意見を伺いたいと考えています。

【協議事項（１）「子ども達の逞しさについて」】

市長

30 年ほど前の私の実体験として、スキー場にアルバイトに来ていた大学生が野外でマッチを使ってゴミを燃やすことができない様子や、缶切りの使い方がわからない様子を見て、衝撃を受けた覚えがあります。今年の夏は非常に暑かったですが、子ども達が川遊びをしている様子を見かけることがありませんでした。涼しい屋内に籠って動画を見たりしている子ども達が多い現状を私は憂慮していますが、皆さんはどうお考えでしょうか。また、様々な人から、「夏休み中に子どもの面倒を見ることが大変だ。」という話を聞くと、私たちが育った頃のような、「放っておいても子は育つ」ということが難しくなっていると感じています。このような状況を見ていると、極端な話ですが夏休みを無くしたり、時期を変える議論はできないのかと感じています。何を言いたいのかといいますと、私はキャンプ活動が大切なのではないかと考えています。キャンプ活動は逞しさを育むことに加え、防災の観点からも大切な知識を得ることができると考えますが、教育の現場で取り組むことはできないでしょうか。皆さんの意見を伺わせてください。

角谷委員

家庭環境や子育て環境で見えていくと、10 年前に比べて現在は、精神障害を持つ 20 歳以下の子どもの増加していますが、その要因は、親と離れて過ごす時間が増えて親子の関係性が変わったためだと言われています。以前知り合いの精神科の医師から、子どもだけ治療するのではなく、親子の関係を見直したうえで治療を行わないと快方には向かわないという話を聞きました。そういう点で生活体験は大切に、親が子に様々な体験をさせるように私たちも伝えていかなければいけないと思います。また、保育園留学で入園した子どもで、毎日園庭でカエルを捕まえている子どもがいました。興味を持ったことを飽きるまでさせてみることや、ある程度時間的な余裕がある中でゆっくりと育てることが大切ですが、そのためには家族の生活パターンを見直し、子どもと触れ合う時間を確保する必要があると考えます。先日アメリカのボストンに行って、保育施設の視察や大学の先生から話を伺ってきましたが、学術的にも子どもが保育施設で過ごす時間は 4～6 時間程度とし、あとは家族と過ごすようにした方が良いという話がありました。家族が子どもと過ごす時間を増やせるような社会の仕組み作りから始めていく必要があると考えています。

西野委員

1981 年夏に米国イリノイ大学に Leisure Recreation Studies の訪問教授として赴任し、1982 年 9 月に東海大学へ帰任しました。その間に、青少年教育を意識しながら組織的に行われる「組織キャンプ」についても体験しました。Leisure は日本では「余暇」と訳されてきましたが、それが欧米の捉え方と大きく異なることを痛感しました。帰国後、南魚沼市内で一

	週間程度の組織キャンプを3月と8月に開催してきました。期間中はテレビやゲームから離れて野外で遊ばせましたが、子ども達は楽しんでいました。市長のお話にあったマッチや川遊びについては、子ども達の生き残り技術の退化が主因だと思います。社会が「マッチやナイフを持ち歩いてはいけない」、「川で遊んではいけない」という情勢になっているため仕方ない部分もあると思います。しかし、キャンプを行うことはできると思いますし、市長のお話は的確だと思います。欧米諸国でもキャンプなどの野外活動、野外教育は盛んで、学校とは別の教育機関や団体が必要だという考え方が大勢です。また、キャンプなどの活動を手伝う高校生や大学生にも、奨学金申請や入試の際の評価上昇などのメリットを設けていて、社会を巻き込んだ仕組み作りがなされています。このような仕組みづくりはすぐにでも始めるべきだと思います。南魚沼市では、今までは都会の子ども達が野外活動をするために訪れていましたが、これからは地域の子どもの達が野外活動ができるようにしていくことが重要だと思います。
市長	子ども達にキャンプの仕方を教えられる人材の育成について、私が子どもの頃はリーダー研修会というものがありました。今はないのでしょうか。
須藤委員	20年ほど前までは、県の教育委員会が教師を対象とした野外活動の研修会を行っており、研修を受けた教師が自校に戻って児童、生徒に実践していましたが、授業時数を確保しなければならない都合上、学校行事が精選されていき、現在では取り組んでいる学校は減少しています。非常に大切な活動ですが、学校現場の現実的な理由によりなかなか取り組めていない現状です。
西野委員	国立・県立そして市立のいわゆる「野外活動センター等」は、もちろん例外もありますが近年、閉鎖や廃止の方向に向かっているように感じられます。
市長	現在は学校でキャンプ活動は行っていないのでしょうか。
角谷委員	子ども会の活動としてやっています。
川島委員	私が小学生の時、夏休みに学校でお泊り会を行った記憶があります。夜にプールに入ったり、家庭科室で料理をしたりしましたが、家庭とは違う環境で体験活動をするのは大切だと思います。一方で現在は体験活動をしている子としていない子の格差が拡大していて、小学6年生で卵を割ったことがない子や布巾を絞ったことがない子もいます。そのため、家庭内での生活体験を基礎としたうえで野外活動が必要になってくるのではないかと考えます。日本は災害大国ですので、防災面でもキャンプなどの体験は必要になってくるのではないかと感じています。
教育長	子ども達の逞しさを育むためにも野外体験が必要という意見は皆さん共

	通だと思います。学校教育の現場では、子ども達に様々な体験をさせるために様々な活動をカリキュラムに取り入れていましたが、その結果学校教育の担う役割が多くなり過ぎて、授業時数の確保が必要となった経緯があり、現在では、教科学習に力を入れ、体験活動は縮小されている状況です。
市長	時間がなくなった理由は何でしょうか。週休二日制でしょうか。
教育長	それもあります。そのほかに指導者側の問題もあります。以前は教員が受講できる体験活動に関する研修が豊富にありましたが、授業時数を確保するために研修に行けなくなったということも原因の一つです。
市長	それでは現状では学校活動の範疇でキャンプ活動を行うことは難しいということでしょうか。
教育長	難しいです。
角谷委員	山口エマさんという方が監督した「小学校～それは小さな社会～」という映画があります。小学校は日本の公立校、中学からはインターナショナルスクール、大学は海外へ進学した監督が、海外生活を経て、日本人の時間の正確さや清潔さの理由を考えたときに、小学生時代の過ごし方、特に特別活動と言われる給食や掃除に理由があるのではないかと作成したドキュメンタリー映画です。日本の学校教育で海外に誇れる日本人らしさを育むことができており、野外活動は学校現場での対応が難しいであれば、野外活動については学校外で育む仕組みを整備した方がよいのではないのでしょうか。また、都会の子ども達が野外活動に南魚沼市を訪れているのであれば、地元の子供達と一緒に活動させるのもよいのではないのでしょうか。住んでいるところが違えば言葉や習慣も違うので、異なる文化に触れることは子ども達にいい影響を与えたいと思います。
西野委員	教員に学校の野外活動を管理運営していただくことは、教師の負担増に繋がることにならないかと強く危惧します。アメリカの教師は、主として子ども達のいわゆる知識教育に関わることが求められており、組織的キャンプは、専門のインストラクターや看護師等が専門スタッフとしてチームを組み、ビジネスとして運営されているケースが多く見受けられます。また、ビジネスとは一線を画し、宗教団体やボランティア団体によるキャンプも盛んです。そうしたキャンプはリタイアした人達がインストラクターとして指導しています。当市におけるスキーインストラクターも仕事を退職した人が多いと思うので、同じような形でできるのではないのでしょうか。
須藤委員	私は、逞しさとは生きていくために必要な力ととらえています。資料のアンケートを見ると、子ども達の生活体験の習熟度が低い理由の1位が「体験する機会が少ないから」となっていますが、その原因は親が子どもの習い事などを優先し、生活体験の優先順位が低いからだと思います。現在の

	世の中は昔に比べて豊かになっているので、学校や家庭の中で、意図的に生活体験をさせるという意識が必要なのではないかと思います。学校で授業の選択制ができたときに子ども達に選択の理由を聞いてみると、「こっちの方が楽だから」という子ども達がありました。生活が豊かになったが故に、快適な方を選ぼうとする習慣が根付いているのかもしれませんが、だからこそ先々の人生の役に立ち、成長に繋がるような体験をさせてあげたいと考えています。
市長	世の中の大人たちも同じように考えている人は多いと思いますが、そこで一歩踏み出す人がいないことが現代社会の問題だと思っています。私は（野外活動の取組を）是非やりたいと思っていますので、学校現場の話に限らず、実現に向けた皆さんのお考えを聞かせていただきたい。
西野委員	一昨年から「デイキャンプ」と呼ぶ宿泊なしの「通いキャンプ」を、退職教員や有志の皆さんと小中学生や保護者の皆さんを対象に、春、夏、秋、冬に4回行っています。参加している大人の中から「お手伝いさせてほしい」という声も上がっています。
市長	先ほどの話の中で学校現場には頼れないということがわかりましたので、それ以外で知識のある組織や団体の力と、教育の知見のある人たちの知見を合わせて取り組めないものでしょうか。
川島委員	今後、休日の部活動が外部指導者によって行われることと、今の話はマッチするのではないのでしょうか。入口としては習い事感覚でも、継続することで人の繋がりもできてくるのではないかと思います。まずは中心となる組織が必要だと思います。
市長	現在の南魚沼スポーツパラダイスやスポーツ＆ライフ南魚沼だけではなく、スポーツだけではない観点が必要となるので、既存の組織に捉われずに考える必要があります。
角谷委員	適齢期や臨界期という、物事を覚えるのに適した年齢があるので、これらと組み合わせれば指導者も集められると思います。また、取組が始まれば学校がその取組を活用することで学校教育にも生きていくと思います。
教育長	先ほど学校現場では限界があると話しましたが、理科や社会の授業で取組む初歩的な体験を発展させるようなものが地域の中で生まれれば素晴らしいと思います。また、防災という観点からも自然活動や野外活動は重要であり、様々な人たちが関係することで、子ども達が学校で教わった防災教育が発展するのではないかと考えています。
市長	できるとすれば夏休みしかないのでしょうか。

川島委員	長期の休みが参加しやすいと思いますが、土日でもできると思います。
角谷委員	日帰りか宿泊か、どこからスタートするかで変わってくると思います。
市長	本日は皆さんのお話を伺い、様々なヒントを得ることができました。ありがとうございました。協議事項(2)「学力向上の取組について」は時間の都合上資料配布のみとさせていただきます。
市長	協議事項(3)「その他」についてですが、本日市内の製造業の方と話を聞く機会があり、子ども達のプログラミングの教育に力を入れて欲しいという話がありました。今まで農業や観光業の関係者から話を聞く機会は多く設けてきた自負がありますが、製造業の方から話を聞く機会が少なかったと反省しています。製造業は市内の従事者数も経済規模も最大ですが、支援が行き届いていなかった部分があるかもしれないと思いました。製造業の振興を図る組織を作りたいという要請が来ているので、行政としても協力したいと考えていますが、教育委員の皆様と協力することでよりよいものとなると思っていますので、是非ご協力をお願いします。
角谷委員	小学校3～4年生くらいがプログラミングに興味を持ちやすい年代だと思うので、ターゲットを絞ってできることがあるのではないかと思います。
市長	プログラミング教育では県内で長岡市と三条市が突出しているという厳しい指摘もいただいたので、プログラミング教育に限る話ではありませんが、職業理解などの教育にも取り組む必要があると考えています。
事務局 (企画政策課長)	林市長ありがとうございました。事務局から連絡事項があればお願いします。
事務局 (教育部長)	予定どおり、この後15時から教育委員会を開催します。
事務局 (企画政策課長)	最後に閉会の挨拶を岡村教育長からお願いいたします。
教育長	本日の総合教育会議では、雪をも解かすような熱心な議論をしていただき大変ありがとうございました。冒頭の市長の挨拶の中で、多くの市民が子ども達の将来に不安を抱いているという話があり、遅しさについて議題とさせていただきました。遅しさとは困難に打ち勝つ力だと思いますので、これからも教育委員会として考えていきたいと思っています。久しぶりの総合教育会議ではありましたが、大切な「遅しさ」について議論できたことに感謝申し上げて閉会の挨拶とさせていただきます。本日はありがとうございました。

事務局 (企画政策課長)	岡村教育長ありがとうございました。以上で令和6年度第1回南魚沼市 総合教育会議を閉会いたします。大変ありがとうございました。
-----------------	---